



スノウ・スノウ
ウ・スノウ



渡辺 ウキ

落ちてくる。乱雑な雪。形も大きさもふぞろいの、破って捨てた紙片みたいな雪が舞うでもなく、ただすとんととひっきりなしに落ちてくる。こんなふうに潔くまっすぐ落下し続ける雪の軌跡を見ていたらあいつのぶっきらぼうだけど相手にきちんと反射する強い眼差しが思い出された。というか、いまここに降りかかる雪を思いきり睨むあの眼があってほしいと願った。そうすれば身体を縮こませ気分を萎えさせる寒さがたちまち冷たい岩清水みたいに爽快な活力を与えるものになり、僕らは粗暴な雪の中を傘もささずに愉快地歩き続けたら。積もりたての真っ白でやわな雪を靴先で蹴とばしながら。だけどそんな空想はむなしかった。あいつは去年の秋に高校を中退しそれから僕は学校へ行かなくなったから。

暮れたばかりの空みたいな藍色の傘を頭上にかざし、バス停に向かって道路を横切る。行き交う車は慎重に雪道を進んでいて、いつもの何倍ものろい。バスも遅れるかもしれない。僕は少しいらした。案の定バス停の脇にある野ざらしのベンチには雪がべったり凭れかかって座れたものではない。僕の靴は穴でも開いているのか水がしみこんでぐずぐずと靴下が湿ってきていた。その感触はかなり憂鬱で、バスで座れたなら真っ先に靴を脱いで解放されたい、目立ってしまおうと裸足になって足を温めたい。そればかり考えてバスが来る方向を伸びあがって見ていたら、「バス、来ないと思うよ」と抑揚の少ない落ち着いた声が僕の背中にコツンとあたった。振り向くとあざやかな緑の傘をさし、カフェオレ色のダッフルコートを着た女の子が春に萌えてたつくしみたいひょこんと立っていた。

冬なのに、雪も積もっているというのになんなのだろうこの軽やかさは。彼女は傘をやや上向きに反らせると、傘の陰にあった自分の顔をあらわにした。鹿のように濡れた黒目がちの瞳の下には雀斑がひかえめな星屑みたいに散っている。心もちぷくとした下唇はゆったりとカーブを描いて僕に微笑んでいるのだとわかる。そんな天使そのものの顔をさらさらした栗色の髪が甘く取り巻いて、なんだかちょっぴり蠱惑的だ。

こんな可愛い子が、なぜ僕なんかに話しかけてきたのだろうか？

「一組の紙谷君でしょう」

「えっ、君って同じ学校？ 同じ学年？」

微笑みを通り越して白い歯をこぼした彼女に僕は素直に驚いた。彼女ほどの容姿なら目立つだろうし、あいつなら絶対ちょっかいをかけたに違いない。なぜ僕もあいつも気づかなかったんだろう。そしてなぜ彼女のほうこそこんな僕に気づけているのだろうか。僕は少々動揺した。学校の子と話すのは久しぶりだし、彼女の美しさにも緊張していた。

「私は六組だから、教室離れてるけど。ていうか、私あんまり学校行ってないから」

冗談交じりにモデルの仕事でもやってるの？ と訊けばよかったらうけどできなかった。そんな有名人ならいくらなんでもとっくに知ってる。きっと人間関係とか複雑な悩みを抱えているんだろう。僕だってどうして自分が学校へ行きたくないのかうまく説明できない。確かにあいつはもういないけど、僕が後追いする必要はない。そんなことあいつが一番嫌がることだ。なのに

ずるずると行けなくなって二カ月が過ぎ、冬休みも終わろうとしている。さっき宿題を持って行った塾の先生に言われたばかりだ。やり直せるチャンスを逃すなど。